

データ削減効果で

バックアップもフラッシュを利用する時代！

ニアラインSAS HDDと同等の容量単価を実現

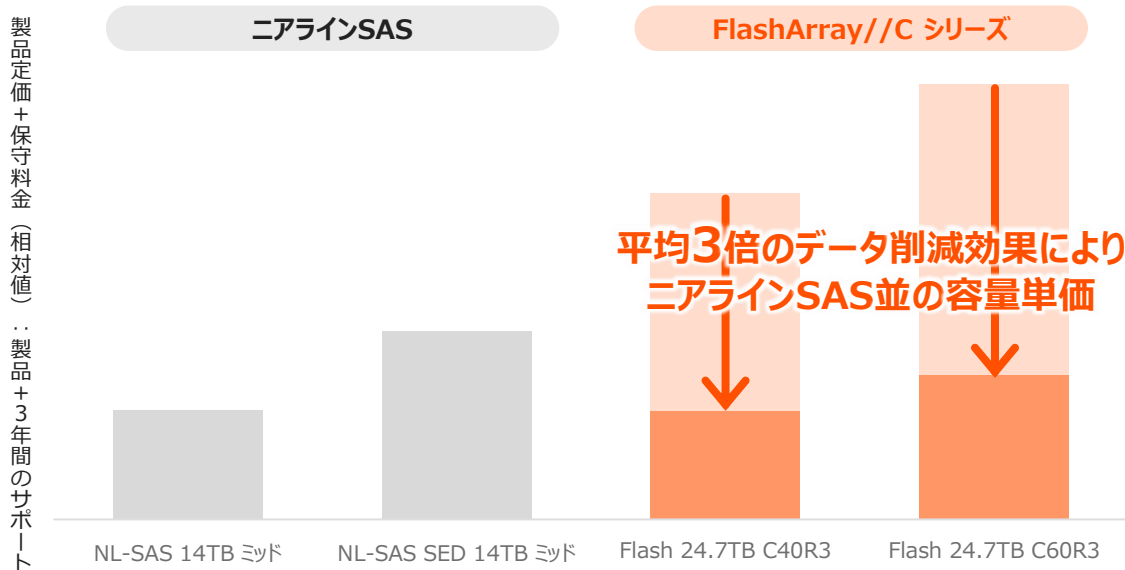
Pure Storage のバックアップソリューション

従来のニアラインSASとフラッシュの運用とコストの違い

| | ニアラインSAS HDD | フラッシュ |
|-----------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|
| バックアップ時間 | パフォーマンスが不安定 × | バックアップウィンドウを小さくし業務への影響を最小化 ○ |
| 復旧時間 | 機械駆動部分があるため読込にムラがあり転送に時間がかかる × | SSDだから短RTO (目標復旧時間) ○ |
| メディア障害 | 駆動部分があるため経年により故障率増 × | HDDに比べ10倍物理的な故障率は低い ○ |
| ランニングコスト (クーリング・消費電力) | 維持コスト (容量密度や消費電力) が高い × | 維持コストが低い ○ |
| コスト | 安い ○ | かつては導入費用 (容量単価) が懸念点 × |

Pure Storageの導入費用はニアラインSAS HDDの容量単価を実現

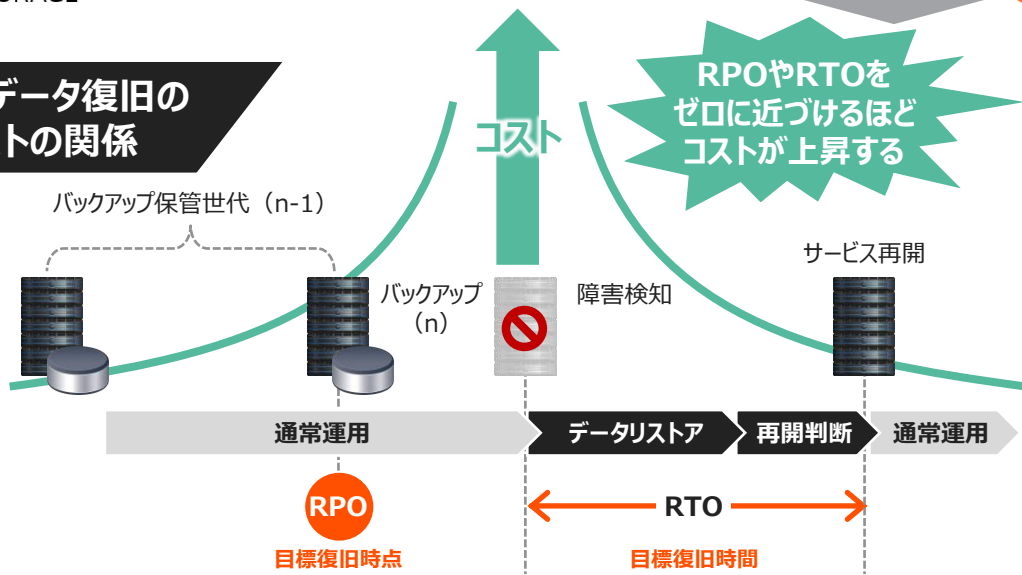
価格シミュレーション (実効容量145TiB)



今は長期保守と容量単価の問題もPure Storageであれば解決可能です

次世代のバックアップはPure Storageで実現

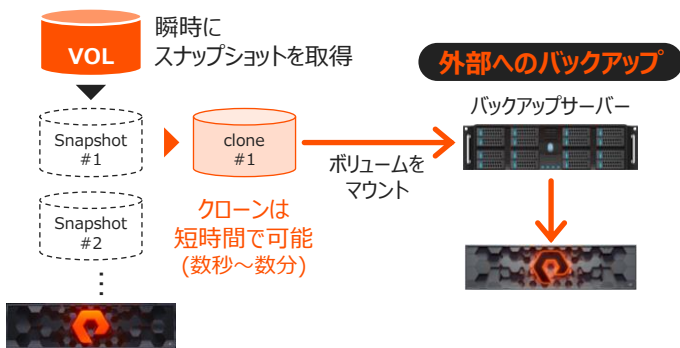
一般的なデータ復旧の 手順とコストの関係



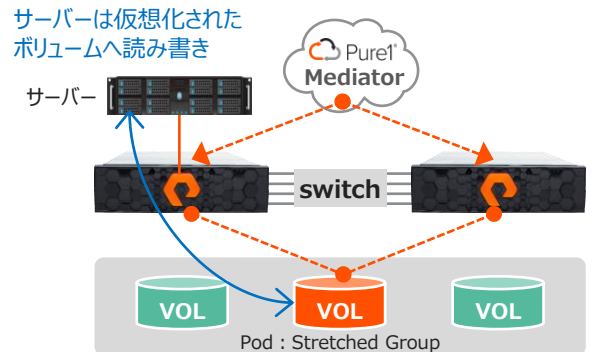
Pure Storage の RPO・RTO短縮のための ソリューション

- スナップショットの取得間隔の設定によりRPOは最短 5 分
- ニアラインより高速なQLCを、独自の技術でデータを1/3に削減することで、低コストでRTOを大幅短縮
- ActiveClusterはゼロRPO/ゼロRTO

Snapshot



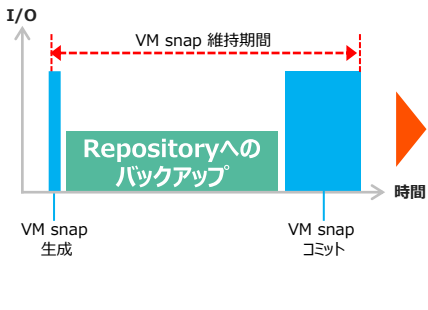
ActiveCluster



仮想マシンのバックアップ (Veeam, Commvault)

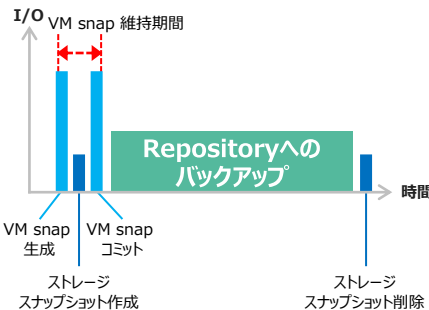
性能問題が発生する要因を最小化

- ストレージスナップショットと連携することで vSphere スナップショットの存在時間を短縮し、STUN 発生リスクを大きく低減
- バックアップはスナップショットからの別ボリュームから行うため、バックアップ実行中フロントエンド I/O に影響を与えない



高速I/Oと運用性向上の両立

- 別ボリューム作成はストレージ内部処理で実行されるため追加のストレージ領域を必要とせず、迅速・効率的な運用を実現
- スナップショット連携のバックアップを改善



ランサムウェア対策

SafeMode機能で管理者権限による Snapshotを削除不可に

- 削除されたファイルを指定した期間保持
- 管理者権限でも削除不可
- オールフラッシュなので感染前のデータを即時復旧可能

